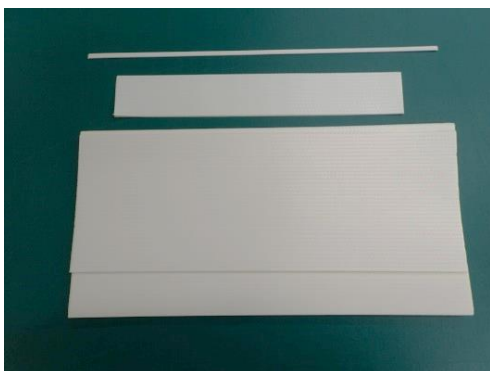


無線綴じ本の修理

～ホットメルトによる方法～



無線綴じの本のページがバラバラ外れてきた場合の修理方法は様々なものがあります。ここでは、接着剤（ホットメルトシート/左写真）を使用してなおす方法を紹介します。

ホットメルトは無線綴じの本に多く使われている接着剤で、高温で溶かして背に塗り固めます。ホットメルトシートはそれをシート状にしたもので、大きさも本の背に合わせて切ることができま

す。ボンドなどの接着剤が乾燥に時間がかかるのに比較して、ホットメルトは数分で乾くため、完成までの時間を劇的に短縮できるメリットがあります。しかし、強度は、「三つ目綴じによる方法」に比べて格段に弱いです。特に本紙が硬い場合などは、またすぐに壊れる恐れもあります。また、貴重な資料や紙が劣化した資料に使用することは避けましょう。

ソフトカバーで、表紙が紙など 180℃以上の高温に耐えられる場合

手順

1、解体

表紙の背から中身のページを外して、一枚ずつバラバラにする。

2、接着剤の除去

外したページに付着している接着剤の滓をきれいに削ぎ落とす。



3、本紙を板に挟んで仮固めする

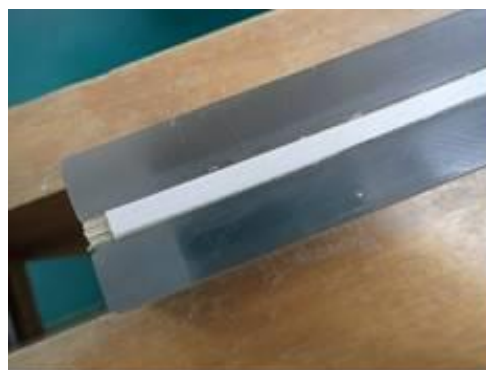
この時、背が滑らかでツルツルであれば、目打ちなどで傷をガリガリ入れてから接着剤で仮固めする。



4、ホットメルトシートを貼る

背（束）幅に合わせて「ホットメルトシート」を貼る（片面に接着剤がついているので剥離紙を取るだけでよい）。

サイズは長さを本紙の天地より数ミリずつ小さくするとよい。（ホットメルトが溶けると広がってはみ出てしまうので）



※ここからの工程は板に挟んだ本体が動かないように、製本締め機やクランプなどで、板をしっかりと挟んでおくといよい

5、背の部分のホットメルトを溶かす

表紙をくるんで、本紙の背（ホットメルトシート付き）と表紙が密着するようにして、再び製本締め機などに挟んで、背側を上に向ける。

このとき、背を板から1ミリ程度飛び出させておくといよい場合もある。

その後、背にシリコン塗布紙（クッキングシートなど）を被せ、上からアイロン（小型のものが作業しやすい）を当ててホットメルトを溶かす。



ホットメルトは170～180℃で溶けるので温度設定もその程度（中～高）にする。

ホットメルトが溶けて潰れたら、アイロンを移動させ、背全体に溶かす。

6、資料を板から外す

数分待つて冷めたらシリコン塗布紙（クッキングシートなど）を取り、資料を板から外す。

7、平部分を接着する

今度は平を上にして置き、シリコン塗布紙（クッキングシートなど）を被せ、その上からアイロンを当てる。

その当て方は以下の通りである。これを全体、反対側の平にも行う。

- ・まず横（背）に当てる
- ・そのまま平の方に傾ける
- ・平に倒してそのまましばらく当てる



ソフトカバーで、表紙がビニールなど 180℃以上の高温に耐えられない場合やハードカバーの場合

この場合は上記のように表紙をくるんで直接ホットメルトで本体と接着することができない。したがって、本体（本紙）部分のみをホットメルトで綴じて、表紙はあとから付けることになる。

本体（本紙）のみの綴じ方は、基本的に工程①～⑨を行えばよい。ただし、表紙をくるむ工程⑤は除外する。

また、補強のため、工程⑤で表紙をくるむ代わりに、背幅より左右5ミリ程度ずつはみ出るくらいの大きさの厚手の和紙を、背に貼ったホットメルトシート上に軽く糊止めしておくといよい。

表紙の付け方は、ソフトカバーの場合は、「無線綴じ本の修理～三つ目綴じによる方法～」あるいは、「かしわ製本」を参考にしてほしい。ハードカバーの場合は、『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル』（日本図書館協会 2005）p.72を参照してほしい。

【補足】元のホットメルトがまだ活かせる場合

元のホットメルトが劣化していない比較的新しい本の場合は、新しいホットメルトシートを使用せず、⑤以降の工程で、とりあえず修理することもできる。